

全学FD2013  
“改革請負人”池田輝政と語ろう

報告書

実施期日：2013年10月30日(水)

開催場所：共通教育棟（主会場C11）

富山大学大学教育支援センター



## はじめに

この1月から富山大学教育支援センター長を担当する事になりました平井です。微力ながら、本学の教育の質の保証等に向けて努力したいと思っています。宜しくお願い致します。

本学では、平成23年に大学教育支援センターを設置し、FD部門長に橋本勝教授を迎えたことを契機に、従来、各部局で展開されてきたFD活動の発展に寄与することを目的として、全学FDタスクチームが中心になって、昨年度から「全学FD研修会」を開催しています。橋本部門長は、前任の岡山大学時代から、長年、学生を含む全構成員参加の討議型FDを推進してきた経緯があり、本学でも、従来あまりなかった新しい形のFDを始めました。

本報告書は、平成25年10月30日(水)に開催された、富山大学全学FD研修会の概要を纏めたものです。

さて、平成24年8月の中教審答申『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～』では、「教育の質保証」と「学習の継続性」の実現のために、教員から学生への一方通行型の授業から学生が主体的に学ぶ授業への「大学教育の質的転換」が強く求められています。しかし、これまで、そうした教育に馴染んでこなかった大学教員が一挙に意識転換することは決して容易なことではありません。

そこで、全学FDでは、基調講演をヒントに、参加者一人一人がそれぞれの立場から大学教育の現在と将来について率直に意見交換することを通して、その方策を探るという形を取っています。この形から得られる相互刺激は、自らの授業だけではなく、学部・学科の教育カリキュラムのありようを見直すことにもなり、富山大学全体の教育改善につながることを期待されます。

今年度の基調講演は、名古屋大学で「成長するティーチング・チップス」を作成したことで知られる池田輝政先生（現、名城大学）にお願いしました。先生は、お忙しい中、基調講演だけではなく、本学からの「できればグループ討議にも参加してほしい」との要請にも快く応じて下さり、一日付き合ってくださいました。

本報告書には、当日のグループ討議のワークシートも採録してありますが、今回はこれを全体討議の場で全員にコピー配布し共有を図りました。当日御参加頂けなかった方に雰囲気は少しでも伝われば幸いです。

最後になりましたが、基調講演をして頂きました池田先生を始め、今回の企画を準備されたFDタスクチーム、特にその中でも全学FD推進ワーキンググループとして御尽力頂いた委員各位並びに学務企画グループの職員各位、また、積極的に御参加いただいた教職員、学生の皆さんに厚くお礼申し上げます。

大学教育支援センター長  
平井 美朗

# “改革請負人” 池田輝政と語ろう

全学FD2013

## プログラム

10月30日(水) 13:30~16:40

五福 共通教育棟 C11教室ほか

13:30~13:35 開会の挨拶…山口センター長

13:35~13:40 趣旨説明 …橋本

13:40~14:40 基調講演 池田輝政氏

現在、名城大学人間学部教授 大学・学校づくり研究科長

講演タイトル：大学教育は商品か否か

### 【講演要旨】

教育を顧客（個客）満足度の視点から見直すという考え方に会ったのはオーストラリアのディーキン大学の関係者との交流だった。それは90年代の中頃の経験で、『学生第一 Student First』という大学のビジョンを浸透させる手段となっていた。当時私は抵抗感のなかにも新鮮さを覚えたが、顧客満足という商業の視点を借りなければ大学人の教育観の転換は困難な状況だったといまは理解している。教育は商品であるか否か。この問いがもし眼前の学生から発せられたと考えた時に、私たちはどのような議論をすべきだろうか。

14:40~14:55 移動（小休憩を兼ねる）

14:55~15:35 グループディスカッション（約40分）

グループは原則として5名ずつで事前に構成。

事前申し込みがない当日参加の方は適宜振り分けます。

基調講演者の池田先生もグループ討議に加わられます。

15:35~15:50 移動（小休憩を兼ねる）

15:50~16:30 全体討議

16:30~16:35 閉会の挨拶：佐藤副センター長

16:35~16:40 アンケート記入

## 参加者一覧

●…グループディスカッションのファシリテーター

### 教員

| No. | 職名              | 氏名 (ふりがな)          | 基調<br>講演 | 討議 | 懇談 |
|-----|-----------------|--------------------|----------|----|----|
| 1   | 理事・副学長          | 山口 幸祐 (やまぐち こうすけ)  | ○        | ×  | ×  |
| 2   | 人文学部教授          | 佐藤 裕 (さとう ゆたか) ●   | ○        | ○  | ○  |
| 3   | 人文学部教授          | 末岡 宏 (すえおか ひろし) ●  | ○        | ○  | ○  |
| 4   | 人文学部准教授         | 入江 幸二 (いりえ こうじ)    | ○        | ○  | ×  |
| 5   | 人文学部准教授         | 恒川 正巳 (つねかわ まさみ)   | ○        | ○  | ×  |
| 6   | 人間発達科学部教授       | 小川 亮 (おがわ りょう)     | ○        | ○  | ×  |
| 7   | 人間発達科学部准教授      | 久保田 真功 (くぼた まこと)   | ○        | ○  | ×  |
| 8   | 経済学部教授          | 王 大鵬 (おう たいほう) ●   | ○        | ○  | ○  |
| 9   | 経済学部教授          | 志津田 一彦 (しづた かずひこ)  | ○        | ×  | ×  |
| 10  | 経済学部教授          | 高田 寛 (たかだ ひろし)     | ○        | ×  | ×  |
| 11  | 経済学部准教授         | 上東 正和 (うえひがし まさかず) | ○        | ×  | ×  |
| 12  | 理工学研究部 (理学) 教授  | 阿部 幸隆 (あべ ゆきたか)    | ○        | ○  | ×  |
| 13  | 理工学研究部 (理学) 教授  | 柘植 清志 (つげ きよし)     | ○        | ○  | ×  |
| 14  | 理工学研究部 (理学) 准教授 | 兼村 晋哉 (かねむら しんや)   | ○        | ○  | ×  |
| 15  | 医学薬学研究部 (医学) 教授 | 木村 裕三 (きむら ゆうぞう)   | ○        | ○  | ×  |
| 16  | 医学薬学研究部 (医学) 教授 | 笹野 一洋 (さきの かずひろ)   | ○        | ×  | ×  |
| 17  | 医学薬学研究部 (医学) 教授 | 田村 須賀子 (たむら すがこ)   | ○        | ×  | ×  |

| No. | 職名                | 氏名 (ふりがな)                 | 基調<br>講演 | 討議 | 懇談 |
|-----|-------------------|---------------------------|----------|----|----|
| 18  | 理工学研究部 (工学) 教授    | 菊島 浩二 (きくしま こうじ)          | ○        | ○  | ×  |
| 19  | 理工学研究部 (工学) 教授    | 佐伯 淳 (さいき あつし)            | ○        | ×  | ×  |
| 20  | 理工学研究部 (工学) 教授    | 篠原 寛明 (しのはら ひろあき)         | ○        | ×  | ×  |
| 21  | 理工学研究部 (工学) 教授    | 豊岡 尚樹 (とよおか なおき)          | ○        | ○  | ×  |
| 22  | 理工学研究部 (工学) 准教授   | 會田 哲夫 (あいだ てつお)           | ○        | ○  | ×  |
| 23  | 理工学研究部 (工学) 准教授   | 田端 俊英 (たばた としひで)          | ○        | ○  | ×  |
| 24  | 理工学研究部 (工学) 准教授   | 並木 孝洋 (なみき たかひろ)          | ○        | ×  | ×  |
| 25  | 理工学研究部 (工学) 准教授   | 山田 茂 (やまだ しげる)            | ○        | ○  | ×  |
| 26  | 理工学研究部 (工学) 講師    | ゾロツキヒナ たちあな (ぞろつきひな たちあな) | ○        | ×  | ×  |
| 27  | 芸術文化学部教授          | 内田 和美 (うちだ かずみ)           | ○        | ○  | ×  |
| 28  | 芸術文化学部教授          | 大氏 正嗣 (おおうじ まさし)          | ○        | ○  | ×  |
| 29  | 芸術文化学部教授          | 林 暁 (はやし さとる)             | ○        | ○  | ×  |
| 30  | 芸術文化学部講師          | 内藤 裕孝 (ないとう ひろたか)         | ○        | ○  | ×  |
| 31  | 芸術文化学部助教          | 小川 太郎 (おがわ たろう)           | ○        | ○  | ×  |
| 32  | 芸術文化学部助教          | 福本 まあや (ふくもと まあや)         | ○        | ○  | ×  |
| 33  | 地域連携推進機構生涯学習部門准教授 | 仲嶺 政光 (なかみね まさみつ)         | ○        | ×  | ×  |
| 34  | 大学教育支援センター教授      | 橋本 勝 (はしもと まさる) ●         | ○        | ○  | ○  |

## 職員

| No. | 職名                 | 氏名（ふりがな）          | 基調<br>講演 | 討議 | 懇談 |
|-----|--------------------|-------------------|----------|----|----|
| 1   | 経済系支援グループ長         | 田村 修一（たむら しゅういち）  | ○        | ×  | ×  |
| 2   | 経済系支援グループ主幹        | 石川 裕史（いしかわ ひろし）   | ○        | ×  | ×  |
| 3   | 経済系支援グループ主査        | 宮尾 幸一（みやお こういち）   | ○        | ×  | ×  |
| 4   | 工学系支援グループ主査        | 織田 世起（おだ せいき）     | ○        | ×  | ×  |
| 5   | 医薬系学務グループ長         | 新井 健二（あらい けんじ）    | ○        | ○  | ○  |
| 6   | 芸術文化系支援グループ主幹      | 山田 豊（やまだ ゆたか）     | ○        | ○  | ○  |
| 7   | 芸術文化系支援グループ学務チーム員  | 堀田 誠一（ほりた せいいち）   | ○        | ○  | ×  |
| 8   | 学務部長               | 清水 博人（しみず ひろと）    | ○        | ×  | ×  |
| 9   | 学務部学務グループ長         | 大野 昭彦（おおの あきひこ）   | ○        | ×  | ○  |
| 10  | 学務部学務グループ主幹        | 出村 昭宏（でむら あきひろ）   | ○        | ×  | ×  |
| 11  | 学務部学務グループ主幹        | 波間 雄司（はま ゆうじ）     | ○        | ×  | ×  |
| 12  | 学務部学務グループ学務企画チーム主査 | 片山 好孝（かたやま よしたか）  | ○        | ×  | ×  |
| 13  | 学務部学務グループ学務企画チーム主任 | 横山 雅彦（よこやま まさひこ）● | ○        | ○  | ○  |
| 14  | 学務部学務グループ学務企画チーム員  | 石田 三緒子（いしだ みおこ）   | ○        | ×  | ×  |
| 15  | 学務部学務グループ学務企画チーム員  | 塩沢 直也（しおざわ なおや）   | ○        | ○  | ○  |
| 16  | 学務部学務グループ学務企画チーム員  | 砂澤 優子（すなざわ ゆうこ）   | ○        | ×  | ×  |
| 17  | 学務部学務グループ修学支援チーム主任 | 久保 均（くぼ ひとし）      | ○        | ×  | ×  |
| 18  | 学務部学生支援グループ長       | 寺林 忠男（てらばやし ただお）  | ○        | ×  | ×  |
| 19  | 学務部学生支援グループ主幹      | 笹岡 博史（ささおか ひろし）   | ○        | ×  | ×  |
| 20  | 学務部入試グループ長         | 高木 学（たかぎ まなぶ）     | ○        | ×  | ×  |

| No. | 職名           | 氏名 (ふりがな)         | 基調講演 | 討議 | 懇談 |
|-----|--------------|-------------------|------|----|----|
| 2 1 | 学務部入試グループ員   | 阿閉 拓也 (あとじ たくや)   | ○    | ×  | ×  |
| 2 2 | 学務部就職支援グループ員 | 山本 紘久 (やまもと ひろひさ) | ○    | ×  | ×  |

学生

| No. | 所属        | 氏名 (ふりがな)          | 基調講演 | 討議 | 懇談 |
|-----|-----------|--------------------|------|----|----|
| 1   | 人文学部3年    | 米屋 保雄 (よねや やすお)    | ○    | ○  | ×  |
| 2   | 人間発達科学部4年 | 笹崎 広大 (ささざき こうだい)  | ○    | ○  | ×  |
| 3   | 人間発達科学部3年 | 加賀見 尚子 (かがみ なおこ) ● | ○    | ○  | ×  |
| 4   | 人間発達科学部3年 | 久保 卓也 (くぼ たくや)     | ○    | ○  | ×  |
| 5   | 経済学部1年    | 内田 実奈 (うちだ みな)     | ○    | ○  | ×  |
| 6   | 理学部1年     | 大上 峻史 (おおかみ たかし)   | ○    | ○  | ×  |
| 7   | 理学部1年     | 三田村 耕平 (みたむら こうへい) | ○    | ○  | ×  |
| 8   | 理学部1年     | 吉村 和倫 (よしむら かずみち)  | ○    | ○  | ×  |

教員 3 4 名 (内訳：基調講演のみ出席 1 1 名、基調講演・グループディスカッション参加 2 3 名)

職員 2 2 名 (内訳：基調講演のみ出席 1 7 名、基調講演・グループディスカッション参加 5 名)

学生 8 名 (内訳：基調講演・グループディスカッション参加 8 名)

計 6 4 名参加

## 基調講演

# 大学教育は商品か否か

名城大学人間学部教授 大学・学校づくり研究科長

## 池田輝政先生

- ・教育学修士
- ・九州大学教育学部卒、九州大学大学院教育学研究科博士課程単位取得退学
- ・大学入試センター研究開発部教授、メディア教育開発センター研究開発部教授、名古屋大学高等教育研究センター教授を経て現職。
- ・名古屋大学時代に「成長するティップス先生」を開発・普及



富山大学 全学FD2013  
大学教育は商品か否か

池田 輝政  
名城大学 大学・学校づくり研究科

2013年10月30日  
主催 富山大学・大学教育支援センター

---

---

---

---

---

---

---

---

自己紹介:FD・EDテーマとのつきあい

- 原点
- 1996-英国オープンユニバーシティを訪問  
遠隔高等教育の教材開発力の凄さを知る
  - 2001-『成長するティップス先生』開発・普及  
教授法の自主的開発を基本の哲学  
手段としての授業デザインの方法論の実践
  - 2007-『名城大学教育年報』の刊行  
授業研究を大学教師の研究力と認める
- 現在
- 2012- 「授業のアクション・リサーチ」の開発・普及  
「カリキュラム・マッピング法」の開発・普及

---

---

---

---

---

---

---

---

ティップス先生  
はいつサヨウ  
ナラというので  
すか？



---

---

---

---

---

---

---

---

### 「成長するティップス先生」の普遍性は？

■「授業デザインを工夫する開発型研究」の一つとして位置づけられています

■目的とするところは、授業担当者のシラバス設計力と教材開発力及び授業運営力の向上であり、最終的には当該授業の継続的な質改善です

■シラバスを起点にした方法論であるので、専門分野を超えたすべての教員にとって使いやすく、その意味では実践的です

■授業開発で得られた実践のエビデンスと知見を教授法の原理(ペダゴジー)に意味づける方法論としてはこれまで課題でした

---

---

---

---

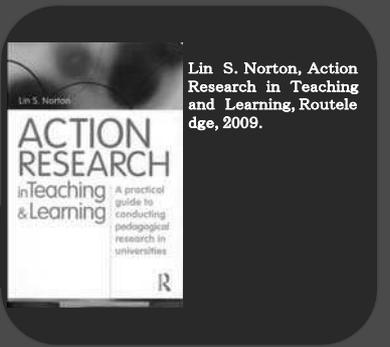
---

---

---

---

最近ですが、アクション・リサーチの授業開発研究に出会いました



Lin S. Norton, Action Research in Teaching and Learning, Routledge, 2009.

---

---

---

---

---

---

---

---

(Lin Norton, 2009, p.xv.)

### 英国における大学教師の苦悩とは？

- (1)なぜ授業に出席しないのか
- (2)なぜ本を読まないのか
- (3)学生の関心を引きつけるには何をすべきか
- (4)分析的に書くようにするには何をすべきか
- (5)経験と理論を結びつける方法は何か
- (6)ゼミで議論をさせるにはどうすべきか
- (7)図書館を活用させるにはどうすべきか
- (8)在学・進級率を良くするにはどうすべきか
- (9)双方向の授業にするにはどうすべきか

---

---

---

---

---

---

---

---

## 苦悩に負けないで解決するには？

■授業研究におけるアクション・リサーチの導入と普及がその一つ

■このアクション・リサーチの原理は学生の学習経験の質に何らかの効果をもたらすこと

■その目的は、授業担当者が授業実践の改善と理論的知識への寄与という二重の目標をもち、自ら工夫する教授・学習実践を体系的に調査研究すること

---

---

---

---

---

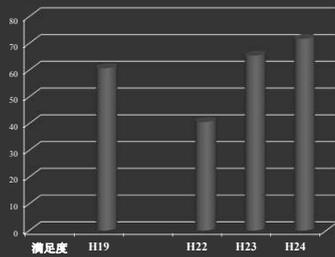
---

---

---

## 過去最悪の授業からの脱出するために アクション・リサーチを始めました

人材育成学 1年次後期開講科目  
H22登録259名 H23登録219名 H24登録185名



---

---

---

---

---

---

---

---

## で、気がついたら 私の苦悩より学生の苦悩が深かった

難しい言葉が多い。

先生が話す時間が長すぎる

90分でやりきれないような内容の多さ。

後半になると授業のペースが上がるが多い。

受講生の態度の悪さ。

私語が多い点。授業中の出入りが多い点。

---

---

---

---

---

---

---

---

いま！  
学生の苦悩に向き合ってます

誰が何といってもやると決めたこと！

- 1 学力不安層の一人ひとりを大事にする授業
- 2 毎回の授業で「学びのポイント」を示す
- 3 単位取得の圧迫から安心な授業をつくる
- 4 理論が役立つことを身をもって理解させる
- 5 質問を怖がるネガの心理をポジに変える

---

---

---

---

---

---

---

---

さらに  
個人としてのFDを超えた難題への挑戦

高校生にわかる  
カリキュラム・マップができないか？

①部分最適をみる傾向の教員中心のカリキュラム運営から



②全体最適をみる教員・職員協働のカリキュラム運営へ

---

---

---

---

---

---

---

---

池田がみた  
カリキュラム・マップの現状

1. 各大学は人材養成目的とDP・CP・APの表現の形をとりあえず整えることができた
2. 人材養成目的とDPとCPの内容の一貫性が弱い
3. 学部によって出来映えに差がありすぎる
4. 全学および学部のトップ層が人材養成目的とDPをカリキュラムに結びつける重要性にまだ気づいていない
5. 国や認証評価機関はDP・CPの作成を求めますがその方法論については各機関まかせの現状

---

---

---

---

---

---

---

---



話の締め  
冒頭の問いにどう答えるか

池田の回答:「カリキュラムは商品である」と敢えて考えてみる必要がある

なぜなら、企業が大事にする商品観とは、

- 1 使う人のためをまず最初に考える  
→ 「学ぶ人のためにカリキュラムはある」
- 2 使う人の喜びが価値であり価格はその反映  
→ 「学ぶ人が喜ぶことがカリキュラムの価値」

---

---

---

---

---

---

---

---

今日の出会いを明日につなげる

ご清聴に感謝します

---

---

---

---

---

---

---

---

## 【基調講演要旨】（要約は経済学部 王教授）

### 1 授業研究におけるアクション・リサーチの導入と普及

学生が「授業に出席しない」「本を読まない」などといった問題は、教員にとって大きな苦悩である。この問題を解決する方法の一つとして、授業研究におけるアクション・リサーチの導入・普及をあげることができる。アクション・リサーチの原理とは「学生の学習経験の質に何らかの効果をもたらす」ことであり、その目的は「授業実践の改善」と「改善のプロセスにおける理論的知識への寄与」という二重の目標を持ちながら、自ら工夫する教授・学習実践を体験的に調査研究することである。

自身の授業研究の中にアクション・リサーチを用いた結果、授業の問題とは教員の苦悩ではなく学生の苦悩であることがはっきりと意識され、問題解決の方向性が 180 度転換した。

### 2 部分最適から全体最適へ

各教員が自分自身の授業の最適化を図るだけでは全体最適には至らない。組織全体が最適化を図る中で、自分自身を位置付けていくべきである。

各大学でカリキュラムマップが作られつつあるが、国や組織の経営層がその意味をよく理解しておらず、形だけが整えられているのが現状である。その理由としてラーニング・アウトカムに対する理解が弱いことが上げられる。ディプロマ・ポリシーとしてのラーニング・アウトカムとは、卒業時に獲得が期待される知識・能力・態度・価値観などをカリキュラムの目標として設計・評価させ、社会に分かりやすく説明することを外から促す概念である。カリキュラムマップとはこのラーニング・アウトカムに沿って目的地とそこへ至る道筋を示すものである。したがってその目的は「生きる力」等といった漠とした言葉であってはならない。

### 3 教育は商品であるか？

企業が大事にする商品観とは、「使う人にとって便利」「使う人の喜びが価値であり、価格はその反映」である。これをカリキュラムにあてはめてみれば、「学ぶ人の為にカリキュラムはある」「学ぶ人が喜ぶことがカリキュラムの価値」なのである。



教員A

ワークシート

書記(名前を記入して下さい。姓だけで結構です。):

阿部

いずれかに○をして下さい。

(○) 池田先生への質問・反論 ( ) グループとしての主張

タイトル

内容を20文字以内で要約して下さい。

ティアドロアポリシーについて

内容

見やすい文字で分かりやすくまとめて下さい。後で資料として採録する可能性があります。

グループメンバーの主張を融合する形でも、誰かの主張をブラッシュアップする内容でも構いません。

図式的なものでもOKです。

カリキュラムマッピングは誰の責任にあるのか。学生の利用しやすいものになるのか。  
ティアドロアポリシーをどのように学生にしんとさせるのか。  
責任感はどうやって授業と結びつけるのか。

※このワークシートはグループ討議終了後、速やかにC11前の担当者に提出して下さい。

すぐに全員にコピーを渡して共有する予定です。全体討議では、池田先生と意見交換するだけでなく、他グループの主張に対する疑問・反論なども自由に発言して下さい。

## 教員B

# ワークシート

書記(名前を記入して下さい。姓だけで結構です。): 久保田

いずれかに○をして下さい。

(○) 池田先生への質問・反論 ( ) グループとしての主張

### タイトル

内容を20文字以内で要約して下さい。

カリキュラム・マッピングの利点・問題点

### 内容

見やすい文字で分かりやすくまとめて下さい。後で資料として採録する可能性があります。

グループメンバーの主張を融合する形でも、誰かの主張をブラッシュアップする内容でも構いません。

図式的なものでもOKです。

(利点)

- ・各授業を関連づける上では重要
- 全体を統合して、カリキュラムを考える上では有効。

(問題点)

- ・芸術領域への適用は困難。あらかじめ設定した能力以上の力を育成する必要があるため。
- マッピングが実態に即さないケースも多いのでは？

※このワークシートはグループ討議終了後、速やかにC11前の担当者に提出して下さい。

すぐに全員にコピーを渡して共有する予定です。全体討議では、池田先生と意見交換するだけでなく、他グループの主張に対する疑問・反論なども自由に発言して下さい。

教員C

ワークシート

書記(名前を記入して下さい。姓だけで結構です。):

豊岡

いずれかに○をして下さい。

(○) 池田先生への質問・反論 ( ) グループとしての主張

タイトル

内容を20文字以内で要約して下さい。

非資格系学部におけるC.M.の難しさ

内容

見やすい文字で分かりやすくまとめて下さい。後で資料として採録する可能性があります。

グループメンバーの主張を融合する形でも、誰かの主張をブラッシュアップする内容でも構いません。

図式的なものでもOKです。

- ・ 資格系学部(医・歯・薬・看護)でのC.M.は比較的容易
- ・ 人文・社会系のみならず理・工においてもアウトカムの多様性
- ・ 本学芸術文化学部ではコース制度で文・理
- ・ 理・工でも学部ではなく学科ならスキルははたかどうかが可能かも?
- ・ 一方で、大学以上の多様性は大切である

※このワークシートはグループ討議終了後、速やかにC11前の担当者に提出して下さい。

すぐに全員にコピーを渡して共有する予定です。全体討議では、池田先生と意見交換するだけでなく、他グループの主張に対する疑問・反論なども自由に発言して下さい。

# ワークシート

書記(名前を記入して下さい。姓だけで結構です。):

福本

いずれかに○をして下さい。

(○) 池田先生への質問・反論 ( ) グループとしての主張

## タイトル

内容を20文字以内で要約して下さい。

本当に授業は学生の役に立たなければいけないのか?

## 内容

見やすい文字で分かりやすくまとめて下さい。後で資料として採録する可能性があります。

グループメンバーの主張を融合する形でも、誰かの主張をブラッシュアップする内容でも構いません。

図式的なものでもOKです。

学生にとって「役に立つ」ということを池田先生はどのような意味で用いているのか。役に立ったという実感も、その時点で持つ場合と、しばらく経ってから持つ場合があるように思われます。満足感優先のために授業の難位度を下げることと、与えるべきことで、問題はより複雑なものではないか。

※このワークシートはグループ討議終了後、速やかにC11前の担当者に提出して下さい。

すぐに全員にコピーを渡して共有する予定です。全体討議では、池田先生と意見交換するだけでなく、他グループの主張に対する疑問・反論なども自由に発言して下さい。

# 職員

## ワークシート

書記(名前を記入して下さい。姓だけで結構です。): 塩沢

いずれかに○をして下さい。

(  ) 池田先生への質問・反論      (    ) グループとしての主張

### タイトル

内容を20文字以内で要約して下さい。

「アクションリサーチの意味について」

### 内容

見やすい文字で分かりやすくまとめて下さい。後で資料として採録する可能性があります。

グループメンバーの主張を融合する形でも、誰かの主張をブラッシュアップする内容でも構いません。

図式的なものでもOKです。

富山大学ではFDの一環として授業評価アンケートを行っているが、いわゆるPDCAサイクルによる授業改善と「アクションリサーチ」との違いについて御教示願います。

※このワークシートはグループ討議終了後、速やかにC11前の担当者に提出して下さい。

すぐに全員にコピーを渡して共有する予定です。全体討議では、池田先生と意見交換するだけでなく、他グループの主張に対する疑問・反論なども自由に発言して下さい。

学生+池田先生

# ワークシート

書記(名前を記入して下さい。姓だけで結構です。): 三田村

いずれかに○をして下さい。

( ) 池田先生への質問・反論 ( ) グループとしての主張

## タイトル

内容を20文字以内で要約して下さい。

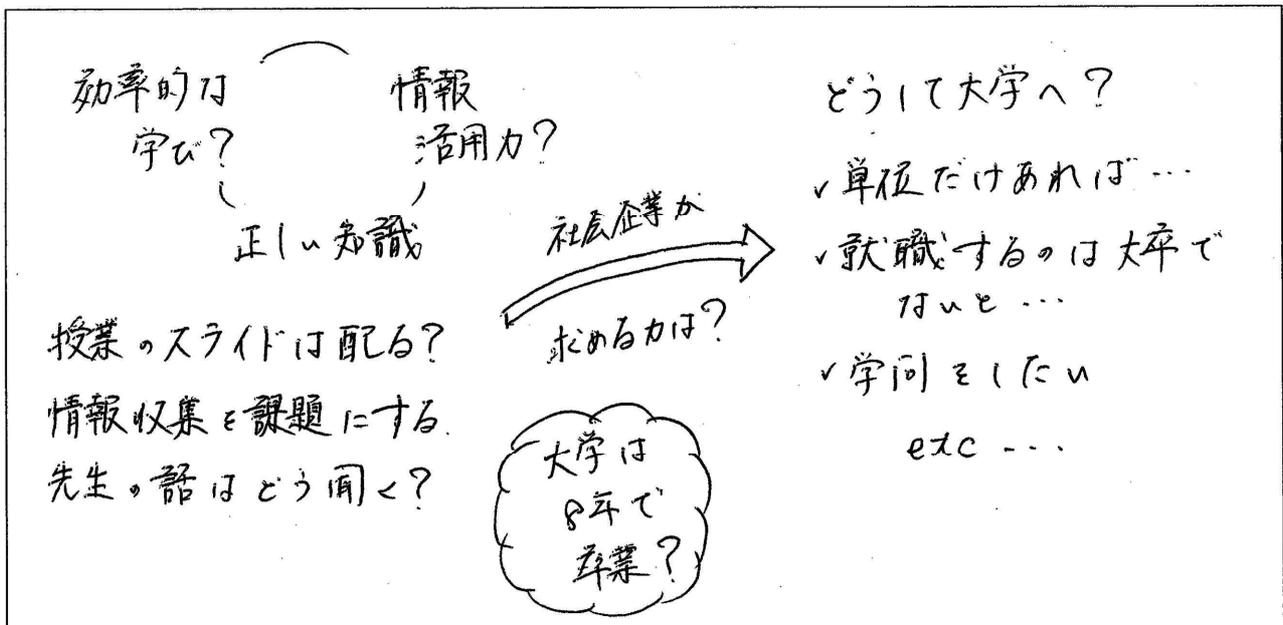
大学の講義(単位)に学生が求めるもの

## 内容

見やすい文字で分かりやすくまとめて下さい。後で資料として採録する可能性があります。

グループメンバーの主張を融合する形でも、誰かの主張をブラッシュアップする内容でも構いません。

図式的なものでもOKです。



※このワークシートはグループ討議終了後、速やかにC11前の担当者に提出して下さい。

すぐに全員にコピーを渡して共有する予定です。全体討議では、池田先生と意見交換するだけでなく、他グループの主張に対する疑問・反論なども自由に発言して下さい。



↑教員Aグループディスカッション



↑教員Bグループディスカッション



↑教員Cグループディスカッション



↑教員Dグループディスカッション



↑職員グループディスカッション



↑学生+池田氏グループディスカッション

### 【全体討議】(要約は大学教育支援センター 橋本教授)

各グループの討議内容を共有し、議論を発展させるため、グループ討議の後、再度、全体が集まり、池田先生への質疑応答を中心に、全体で活発な意見交流を行った。互いに共有しやすいように、今年度は先に示したようなグループワークシートを参加者数分コピー配布するという方法を試してみたが、若干の時間と手間がかかることを差し引いても、一定の有効性があったと思われる。

討議内容としては、まず、教員Bグループ(ファシリテーター、以下、Fと略記：久保田准教授)と教員Cグループ(F：橋本)が共通して取り上げた「カリキュラムマッピングの作りにくい学部があるのではないか」という疑問に対し、池田先生から「実際に取り組んでみるとそうでもない、体験してみることが大切」という回答があった。これに関連して、教員Aグループ(F：佐藤副センター長)からの「カリキュラムマップやディプロマポリシーは主に学生が見るものだとすると抽象的な内容で果たして学生にはピンとくるのか」という問いに対し、池田先生から「入学を考えている人のための可視化であり、今後、社会的注目度はアップするから本気で作るべきだ」という回答があったので、参加していた学生たちに「入学前にその種の情報があれば魅力に感じるか」と問いかけたところ、理学部1年の学生から「自分が大学選びをしていた時に、入学後にどんなことが学べるのかがなかなか分からず、結局、イメージや評判、就職率等で選ぶしかなかった。そういう情報が事前に得られるならとても有用だ」という発言があった一方、別の理学部1年の学生は、「学力偏重入試の現状が変わらない限り受験生の多くにはさほど魅力には映らないのではないか」という反論も提示された。FD研修の場に学生が参加していると、こうした生の声をすぐに聞けるという良さがあることを実感した教職員も少なくなかったであろう。

職員グループ(F：横山主任、全体討議での発言は高岡キャンパスの山田主幹)からは、アクションリサーチとのPDCAの関係性を問う質問が寄せられたが、これに対し池田先生から「両者は整合しないもので、日本の大学教育界に蔓延しているPDCA一辺倒の考え方は取っ払う必要がある」という刺激的な回答があった。主義・主張の多様性は尊重しなければならないものの、特に職員の立場からは日頃から公的文書の中で頻繁にPDCAという用語に接しているため、すぐには納得しづらい内容だったかもしれない。但し、池田先生と同様な主張は他の識者からも時々聞かれるもので、前任校以来10年以上、日本のFD界をリードしてきた私もPDCAには懐疑的であることを何度か公言してきた。むしろ、刺激的な発言を契機に色々と考えることがFDでは重要であろう。

最後に、教員Dグループ(F：王教授、全体討議での発言は福本准教授)から、大学の授業が「役に立つもの」という基軸は役に立つという概念の多様性から混乱するのではないかと問題提起がなされたが、池田先生からは、「教育が一定の目標に向かって行われる以上、役に立つかどうかはそれとの関連で考えればいいのではないか」という回答があった。グループ討議が基礎になっているだけに、どれも中身の濃いやり取りであった。



全学FD2013 参加者アンケート

本日は、全学FD2013にご参加いただき、ありがとうございました。今後の企画の参考にさせていただくため、アンケートにご協力をお願いします。(当てはまる番号に○を付けてください。)

問1 今回の企画の各パート及び全体について評価をしてください。

|                 | 良<br>く<br>な<br>か<br>つ<br>た | あ<br>ま<br>り<br>良<br>く<br>な<br>か<br>つ<br>た | ど<br>ち<br>ら<br>と<br>も<br>い<br>え<br>な<br>い | お<br>お<br>む<br>ね<br>良<br>か<br>つ<br>た | 良<br>か<br>つ<br>た |
|-----------------|----------------------------|---|---|--------------------------------------|------------------|
| 1) 基調講演         | 1                          | 2   | 3   | 4                                    | 5                |
| 2) グループディスカッション | 1                          | 2   | 3   | 4                                    | 5                |
| 3) 全体討議         | 1                          | 2   | 3   | 4                                    | 5                |
| 4) 企画全体として      | 1                          | 2   | 3   | 4                                    | 5                |

問2 (1) グループディスカッションは現在教員・職員・学生が別々のグループとなっていますが、今後どうするべきだと思いますか。

|                                 |
|---------------------------------|
| 1) 混成にするべきである 2) このままで良い 3) その他 |
|---------------------------------|

(2) (1) の回答について、理由・意見があれば記入してください。

|  |
|--|
|  |
|--|

問3 (1) 開催時期について、どう思いますか。

|                                     |
|-------------------------------------|
| 1) 今のまま(10月下旬)で良い 2) 変えたほうが良い(時期: ) |
|-------------------------------------|

問4 今後、より多くの教員・職員・学生に全学FD研修に参加していただくために、良い考えがあれば記入してください。

|  |
|--|
|  |
|--|

ご協力ありがとうございました。最後にあなたの立場とご所属をお教えてください。

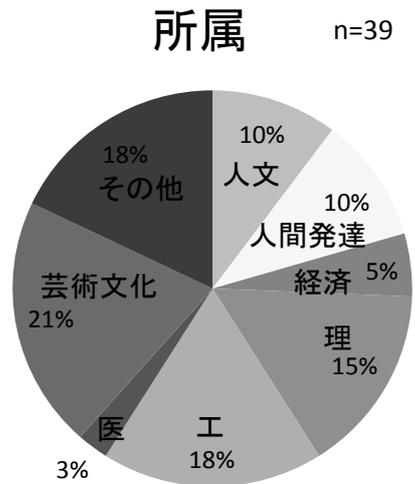
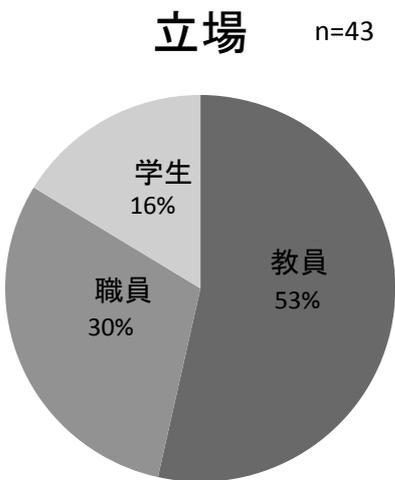
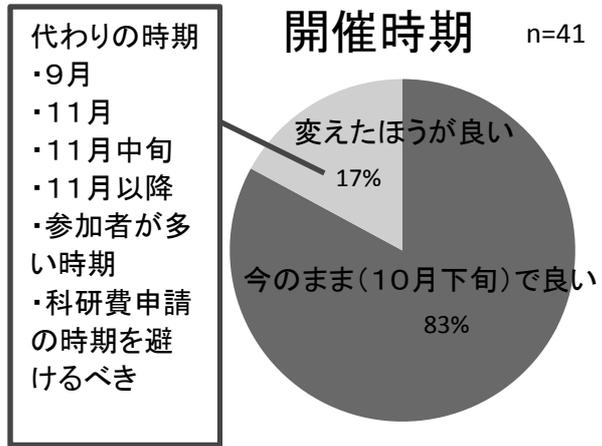
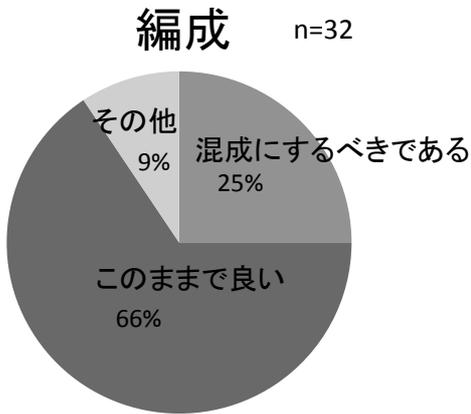
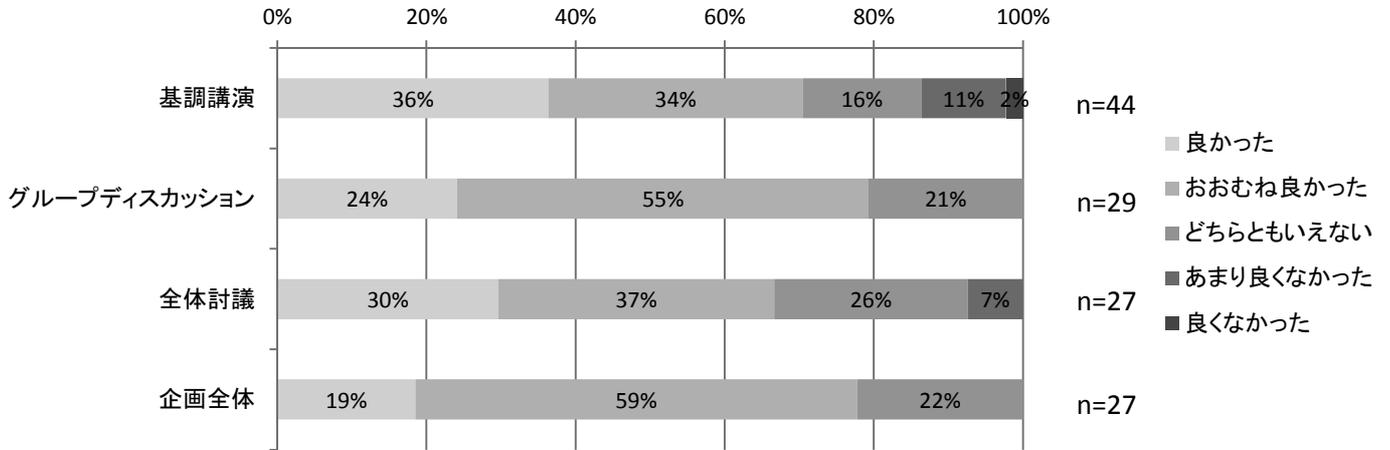
|  |
|--|
| 1) 教員 2) 職員 3) 学生                                      |
| 1) 人文 2) 人間発達 3) 経済 4) 理 5) 工 6) 医 7) 薬 8) 芸術文化 9) その他 |

その他の点について、何かご意見等ございましたら、下の余白にご記入ください。

全学FD2013アンケート集計

| 基調講演         |                | 選択番号<br>(記入数字)       | 1   | 2   | 3   | 4   | 5   | 6  | 7  | 8   | 9   | 10 | 11  | 12 | 回答<br>数計 |
|--------------|----------------|----------------------|-----|-----|-----|-----|-----|----|----|-----|-----|----|-----|----|----------|
| 番号           | 意味             | 基調講演                 | 1   | 5   | 7   | 15  | 16  | /  | /  | /   | /   | /  | /   | /  | 44       |
| 1            | 良くなかった         |                      | 2%  | 11% | 16% | 34% | 36% | /  | /  | /   | /   | /  | /   | /  | -        |
| 2            | あまり良くなかった      | グループ<br>ディスカ<br>ッション | 0   | 0   | 6   | 16  | 7   | /  | /  | /   | /   | /  | /   | /  | 29       |
| 3            | どちらともいえない      |                      | 0%  | 0%  | 21% | 55% | 24% | /  | /  | /   | /   | /  | /   | /  | -        |
| 4            | おおむね良かった       | 全体討議                 | 0   | 2   | 7   | 10  | 8   | /  | /  | /   | /   | /  | /   | /  | 27       |
| 5            | 良かった           |                      | 0%  | 7%  | 26% | 37% | 30% | /  | /  | /   | /   | /  | /   | /  | -        |
| グループディスカッション |                | 企画全体                 | 0   | 0   | 6   | 16  | 5   | /  | /  | /   | /   | /  | /   | /  | 27       |
| 番号           | 意味             |                      | 0%  | 0%  | 22% | 59% | 19% | /  | /  | /   | /   | /  | /   | /  | -        |
| 1            | 良くなかった         | 編成                   | 8   | 21  | 3   | /   | /   | /  | /  | /   | /   | /  | /   | /  | 32       |
| 2            | あまり良くなかった      |                      | 25% | 66% | 9%  | /   | /   | /  | /  | /   | /   | /  | /   | /  | -        |
| 3            | どちらともいえない      | 開催時期                 | 34  | 7   | /   | /   | /   | /  | /  | /   | /   | /  | /   | /  | 41       |
| 4            | おおむね良かった       |                      | 83% | 17% | /   | /   | /   | /  | /  | /   | /   | /  | /   | /  | -        |
| 5            | 良かった           | 変更時期<br>「月」          | 0   | 0   | 0   | 0   | 0   | 0  | 0  | 0   | 1   | 0  | 1   | 0  | 2        |
| 全体討議         |                |                      | 0%  | 0%  | 0%  | 0%  | 0%  | 0% | 0% | 0%  | 50% | 0% | 50% | 0% | -        |
| 番号           | 意味             | 変更時期<br>「週」          | 0   | 0   | 0   | 0   | /   | /  | /  | /   | /   | /  | /   | /  | 0        |
| 1            | 混成にするべきである     |                      | -   | -   | -   | -   | /   | /  | /  | /   | /   | /  | /   | /  | -        |
| 2            | このままで良い        | 変更時期<br>「曜」          | 0   | 0   | 0   | 0   | 0   | 0  | /  | /   | /   | /  | /   | /  | 0        |
| 3            | その他            |                      | -   | -   | -   | -   | -   | -  | /  | /   | /   | /  | /   | /  | -        |
| 企画全体         |                | 立場                   | 23  | 13  | 7   | /   | /   | /  | /  | /   | /   | /  | /   | /  | 43       |
| 番号           | 意味             |                      | 53% | 30% | 16% | /   | /   | /  | /  | /   | /   | /  | /   | /  | -        |
| 1            | 良くなかった         | 所属                   | 4   | 4   | 2   | 6   | 7   | 1  | 0  | 8   | 7   | /  | /   | /  | 39       |
| 2            | あまり良くなかった      |                      | 10% | 10% | 5%  | 15% | 18% | 3% | 0% | 21% | 18% | /  | /   | /  | -        |
| 3            | どちらともいえない      |                      |     |     |     |     |     |    |    |     |     |    |     |    |          |
| 4            | おおむね良かった       |                      |     |     |     |     |     |    |    |     |     |    |     |    |          |
| 5            | 良かった           |                      |     |     |     |     |     |    |    |     |     |    |     |    |          |
| 編成           |                |                      |     |     |     |     |     |    |    |     |     |    |     |    |          |
| 番号           | 意味             |                      |     |     |     |     |     |    |    |     |     |    |     |    |          |
| 1            | 混成にするべきである     |                      |     |     |     |     |     |    |    |     |     |    |     |    |          |
| 2            | このままで良い        |                      |     |     |     |     |     |    |    |     |     |    |     |    |          |
| 3            | その他            |                      |     |     |     |     |     |    |    |     |     |    |     |    |          |
| 開催時期         |                |                      |     |     |     |     |     |    |    |     |     |    |     |    |          |
| 番号           | 意味             |                      |     |     |     |     |     |    |    |     |     |    |     |    |          |
| 1            | 今のまま(10月下旬)で良い |                      |     |     |     |     |     |    |    |     |     |    |     |    |          |
| 2            | 変えたほうが良い       |                      |     |     |     |     |     |    |    |     |     |    |     |    |          |
| 変更時期「曜」      |                |                      |     |     |     |     |     |    |    |     |     |    |     |    |          |
| 番号           | 意味             |                      |     |     |     |     |     |    |    |     |     |    |     |    |          |
| 1            | 日              |                      |     |     |     |     |     |    |    |     |     |    |     |    |          |
| 2            | 月              |                      |     |     |     |     |     |    |    |     |     |    |     |    |          |
| 3            | 火              |                      |     |     |     |     |     |    |    |     |     |    |     |    |          |
| 4            | 水              |                      |     |     |     |     |     |    |    |     |     |    |     |    |          |
| 5            | 木              |                      |     |     |     |     |     |    |    |     |     |    |     |    |          |
| 6            | 金              |                      |     |     |     |     |     |    |    |     |     |    |     |    |          |
| 7            | 土              |                      |     |     |     |     |     |    |    |     |     |    |     |    |          |
| 立場           |                |                      |     |     |     |     |     |    |    |     |     |    |     |    |          |
| 番号           | 意味             |                      |     |     |     |     |     |    |    |     |     |    |     |    |          |
| 1            | 教員             |                      |     |     |     |     |     |    |    |     |     |    |     |    |          |
| 2            | 職員             |                      |     |     |     |     |     |    |    |     |     |    |     |    |          |
| 3            | 学生             |                      |     |     |     |     |     |    |    |     |     |    |     |    |          |
| 所属           |                |                      |     |     |     |     |     |    |    |     |     |    |     |    |          |
| 番号           | 意味             |                      |     |     |     |     |     |    |    |     |     |    |     |    |          |
| 1            | 人文             |                      |     |     |     |     |     |    |    |     |     |    |     |    |          |
| 2            | 人間発達           |                      |     |     |     |     |     |    |    |     |     |    |     |    |          |
| 3            | 経済             |                      |     |     |     |     |     |    |    |     |     |    |     |    |          |
| 4            | 理              |                      |     |     |     |     |     |    |    |     |     |    |     |    |          |
| 5            | 工              |                      |     |     |     |     |     |    |    |     |     |    |     |    |          |
| 6            | 医              |                      |     |     |     |     |     |    |    |     |     |    |     |    |          |
| 7            | 薬              |                      |     |     |     |     |     |    |    |     |     |    |     |    |          |
| 8            | 芸術文化           |                      |     |     |     |     |     |    |    |     |     |    |     |    |          |
| 9            | その他            |                      |     |     |     |     |     |    |    |     |     |    |     |    |          |

# 全学FD2013アンケート集計



全学FD2013 参加者アンケート記述回答（原文のまま）

◎問2「グループディスカッションは現在教員・職員・学生が別々のグループとなっていますが、今後どうするべきだと思いますか。」の各選択肢に対する理由・意見

○問2「1）混成にするべきである」と回答した人の理由・意見

- ・教職員が学生の意見を直接聞く機会が少ないため。
- ・学生の意見が聞きたい。
- ・違う立場の人の考えや思っている事を聞いてみたい。
- ・幅広い意見・議論ができる
- ・意見の幅が広がらない
- ・学生と教員の方では物事の見え方が大きく違うので、見聞を広げるためには混成にした方がいいと思う。ただ、それによる負の面も多いとは思いますが…。
- ・「はじめに」の中で言われていたように『同じことを教員から言われるのと学生から言われるのでは全く違う』という主旨の発言がありました」そうですか、グループをまとめてしまってはどうなの？
- ・学生、教員はそれぞれお互いのことをあまり知らないので、同じ議論でも同時に違った視点の意見を聞けると思うので。
- ・~~混成にするべきである~~しても面白いのではないか。（注：選択肢に記述）

○問2「2）このままで良い」と回答した人の理由・意見

- ・まずはそれぞれの部所での対応が出来る点
- ・教員と一緒にの方が話し難いでしょう。
- ・教師、職員の方々に混って学生が討議しようとしても、学生側からは発言しにくいと思う。だから今のままで良い。但し、学生が1/2、教師1/4、職員1/4の割合だと混成が良いかもしれない。
- ・内容の中核である **action research** 等の説明がない（その内容はすでに受講者が知っていることを前提としている）（注：自由記述の回答欄間違い？）
- ・もう少し時間を取った方が良い。
- ・混成にすると視点を固まらせることができないから
- ・とりあえず意見を集約させやすい
- ・学生が教員グループに入れば、発言は限られてしまうと思うので。

○問2「3）その他」と回答した人の理由・意見

- ・回答：試しに混成にしてみても？ 理由・意見：様々な意見を直接きける。
- ・回答：記述なし 理由・意見：そのつど議題によりフレキシブルになるのが理想かと

- ・回答：学生のディスカッションを観察したい。理由・意見：混成にする場合、ルール（役割）などを明確にする必要あり。
- ・回答：教職員の学生グループへの、オブザーバー参加を、認めていただけるとよいかもその逆も。理由・意見：学生が教員グループに入れば、発言は限られてしまうと思うので。

◎問4「今後、より多くの教員・職員・学生に全学FD研修に参加していただくために、良い考えがあれば記入してください。」への記述回答

- ・学生からの報告があってもおもしろいのでは。
- ・1人ずつ学部で学生を推薦してもらおう。(遅刻の多い人の方が良いかも)
- ・10月～11月は学会、科研費のメ切等忙しい時期である。
- ・ヘルンシステムで全員に呼びかけてみるのが良い。
- ・具体的な内容をもり込んだポスターを大学の至る所に貼付する。「研修」というタイトルリングでは学生に趣旨が伝わらない。また参加したことで学生に何らかのメリットが発生するようにすべき。
- ・問題点の表示。(時前に。)
- ・参加は義務にしてはどうか(何年かの内に一度は参加)
- ・移動手段の確保または、遠くシステムの活用
- ・様々な分野の専門家をオムニバス形式で講義をしてほしい。
- ・参加しやすい環境を整える。
- ・日程構成、告知
- ・参加者が今回の事を、各部所で発言、発信していく事アクションを起していく
- ・参加者に何か特典があるとか
- ・アイスブレイクの時間が、それほど重要とは思えませんでした。今回は2回めだったので、慣れていたせいか。楽しいですがディスカッション時間が制限されてしまう。
- ・ポスター以外に、授業中に教員や学生が宣伝する時間を設ける。
- ・他の行事とできるだけぶつからない配慮
- ・よいきっかけとなるこのようなFD研修会はよいと思われる。
- ・オンライン(e-ラーニング方式)による必須化(本日の基調講演のような内容)と作業部会との同時並行と往復にする方法の表記
- ・複数回の開催を!
- ・初めて参加しましたが、その理由は、演題名とテーマのネーミングに魅かれました。テーマは大事だと思います。

◎自由記述

- ・新しい横文字語を無定義で使う講演は一般的でないので避けて欲しい。(最後までラーニングアウトカムは明確になりませんでした。)
- ・最後の佐藤先生の「コミュニケーション」と「共有」の話は非常に良かった。
- ・新たな視点が身についたと思います。ありがとうございました。
- ・大学のディプロマポリシーの一覧があった方がよかった。
- ・企画していただき有難うございました。遠路はるばる来ていただいた池田先生に感謝することは勿論企画・運営に携わっていただいた方にも、心から感謝申し上げたいです。意見を言うことは、内容的にもタイミング的にも難しく、周りの方の意見を聞いているだけになりました。しかし、「聞く」ということは、思っている以上に自分の勉強にもなり、大切な時間を共有させていただいた感じで、有意義でした。人との関係が苦手な私はこれから就職をするにあたり、多方向の勉強が必要であると考えております。また宜しければ、参加させていただけると嬉しいです。有難うございました。

## 結びに代えて

本学では、従来から、教養教育実施単位も含め、各部局において活発にFD活動が展開されているが、昨年度から、全学FDタスクチームの企画・運営で、全学FD研修を開始した。厳密には、私の大学教育支援センター着任以前にもこうした全学的なFDが開催されていたようなので「再開した」という表現を取るべきであるが、私が、責任者となったことで、以前の内容とは大きく異なっている。一般的な講演会スタイルも一部、取り入れてはいるが、全学FDでは3つの特徴が加わっている。すなわち、

1. 討議型FD
2. 全構成員型FD
3. 楽しむFD

の3つである。単に良い教育実践報告や大学教育改善につながる教育講演を受け身的に聞くだけではなく、参加者全員が自分の疑問や考えを率直に意見交換するグループ討議を研修の中核に据え、事務職員や学生も参加者として加わる大学構成員全体でのイベントとして展開し、しかも、できるだけ楽しく明るい雰囲気で開催しようとするものである。言わば、2年前の中教審答申風に言えば、FDの「質的転換」を目指しているわけであるが、近年、こうした形のFDは全国各地で散見されるようになってきている。

特筆すべきは、本学でも、既に今年度、杉谷教養では類似の形が導入されたばかりか、そこでは、学生の報告もあり、学生・教職員が同じテーブルでフラクに意見交換する形が試行され活発な展開が好評を博している。むしろ、全学FDはその一歩手前にとどまっている感が強い。また、他の部局でも、少しずつそういう要素を加えつつあり、上記の3つの特徴は、既に全学FDに固有のものではなくなってきていると言ってよい。

大学教育改善は教員、職員、学生が同じベクトルで推進しなければ実効性がないから、構成員全体が自分の問題として積極的に話し合いに参加することは、FDの行きつく先として自然な方向性とも言えるが、多くの参加を促進するためにも、意義の高さと同時に楽しさを追究することもまた大切な要素である。

昨年度に比べ微増ではあったが、もう少し参加人数を増やす必要があるなど、反省点も残ったが、今年は、全学教FDタスクチームの中に、全学FD推進ワーキンググループを設置し、経済学部の大嶋座長を中心に、人文学部の末岡宏委員と私が協力する形で企画・運営を進める形を取った。FDの進展のために、次年度以降もこうした体制を継承していきたいと考えている。

最後に、学務企画グループの横山、塩沢両氏には、参加者としてだけではなく、裏方スタッフとして大変お世話になった。記して感謝の印としたい。

企画責任者（FD部門長）

大学教育支援センター

橋本 勝

[付記]

学生たちの学びに対する意識を高めるため、本イベントとは別に、約1か月後の11月24日(日)に、学生参画型FDイベント(=第3回UDトーク)も開催し、約60名の学生・教員・職員・一般市民・他大学の教職員が参加し、大学教育に関する活発な意見交換を行った。昨年度に第1回を開催した後、本年度はぜひ複数回行おうということになり、6月9日(日)の第2回に続き本年度2回目の開催となったものである。

大学評価・学位授与機構も世界的な潮流として「学生参画」を強く意識し始めているが、本学では、全学FDタスクチームの中に、学生参画型FD協力ワーキンググループも設置されるなど確実に定着・成長しつつある、こちらにも今後の発展を期待したい。

全学FD2013  
“改革請負人”池田輝政と語ろう  
報告書

発行／2014年2月  
編集・発行／富山大学大学教育支援センター 富山市五福3190番地